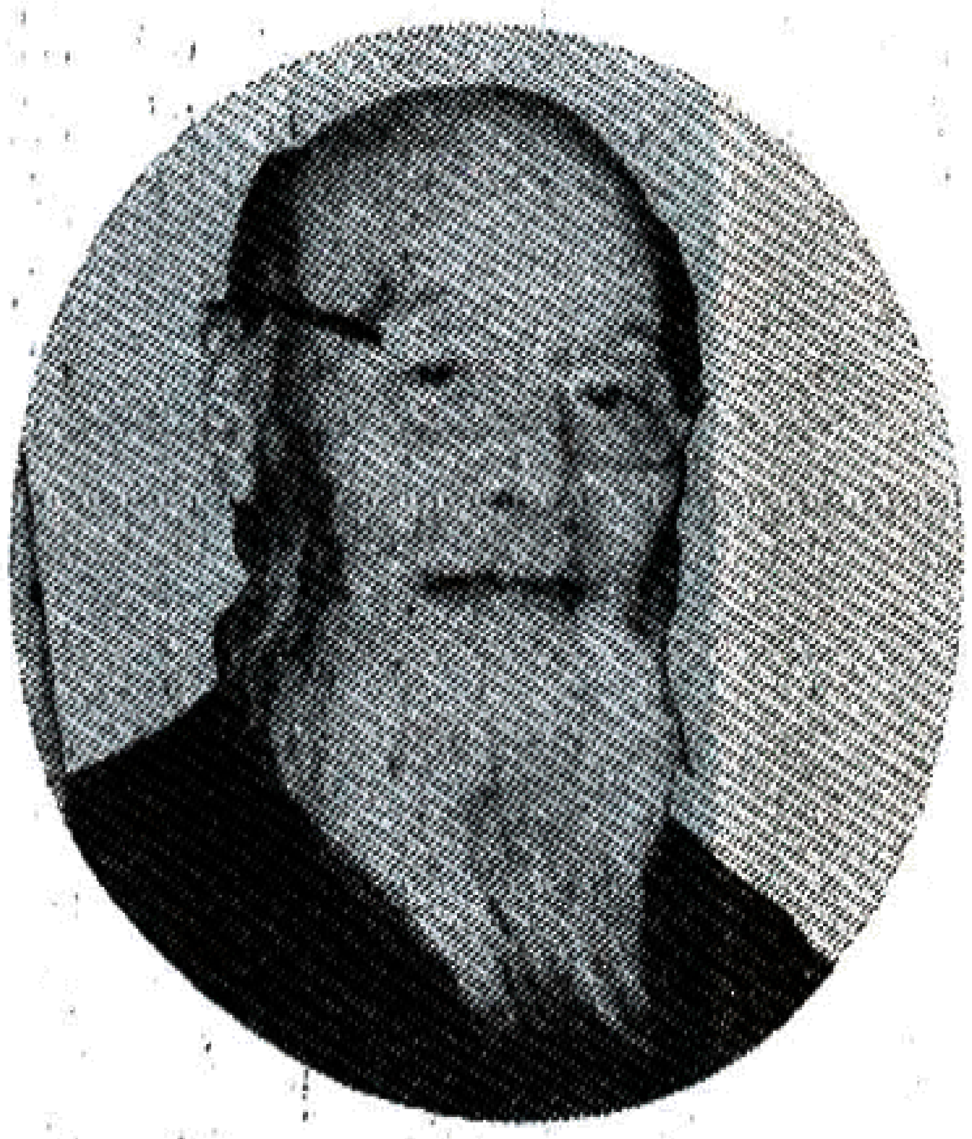

偉聖

小西迦葉先生を偲ぶ

吉水忠男

小西迦葉先生は明治二十四年七月二十四日四国の丸亀市福島町にお生れになりました。姓は倉本、名は茂であります。

小学校では勉強が大嫌いで、毎日トンボ釣り魚釣り兵隊ごっこなど遊んでばかり。卒業式が終った帰り道、橋の上で、くるくる巻いた卒業証書を目にあてて四方の景色を眺め「バンザイ！」、それは嫌いな勉強から開放された歓声でありました。それから呉服店に勤められましたが、肋膜炎にかかり遂に医者から見放されるに至りました。死の寸前にある先生を、お寺へ詣らせてあげたいとの念願から、近所の熱心な浄土真宗の信者の方々とお母さまが、衰弱しきった先生の病体をかかえて、報恩講が勤められている高松別院へ運び込まれました。

お詣りの人々の一番前へ連れてこられた先生は、病身を支えられながら本堂内の眼前の有様に注視せられました。そこには、ご本尊阿弥陀如来を中心として紫衣、紅衣、金襴銀襴の法衣をまとった満堂のお坊さんたちが香煙ゆらぐ中で読経せられております。その荘厳に遇った瞬間、ああこれが小さい頃から聞いていた極楽であるか。ああ！　という深い感動に全身を打たれました。この感能、それは聖なるもの絶対的なるものの感見、純粋直観（即ち信心）でありました。この世から去って、この阿弥陀さまの御国に帰るのだというこの純粋な一つの心の出来事が後の先生を産み出したのであります。それは明治四十二年十一月二十三日先生の十九歳の秋でありました。

医者はもとより匙を投げていますから何もかも茂さんの思いどおりにさせてあげなさい。今さら胃腸を損う心配もいらぬということで、固い物でも何でも食べたいと言われる物を食べさせました。ところが、それが体の栄養となったのでしょうか、あるいは、有難い極楽を見た。もうこの世に何の思い残すことも無い。死ねばこのような素晴らしい国へ往けるのだという心の大きな安心によるものでしょうか、死の淵にあった先生は全く奇蹟的に一命を取り止めたのであります。

先生はこの極楽や阿弥陀さまのことを知りたいと願われて、かな付きの阿弥陀経を借りて、病床で横向きになって繰り返し繰り返し読まれました。その当時を回想せられて、阿弥陀経の一字一字が、

ちょうどリユウマチス患者の指のような硬直し屈曲した形で、こっちへ来いこっちへ来いと私を呼び招いてくれたと申されておりました。

「言わず語らず覚えず知らず、一字無き身が丸助け」

遂に病床を離れることができました。先生はこの不思議な仏教を勉強させて頂きたいと、お父さまに願い出られたところ、お父さまは、お前の命は仏さまの命で継がれたものであるから、仏教を勉強するがよい。ただ、お金もうけのためにしてはならぬと許可せられました。

そこで、近くの檀家寺で仏教を学ばれることになりました。ある日、そのお寺の書庫で大蔵経に眼を留められました。このお経を全部読みたいという願いを述べられますと、坊守さんは、大学者でさえもこの大蔵経を全部読まれた方は殆んど無いと聞いている。まして小学校しか出ていない者が、分をわきまえぬ大それた望みだと鼻先で笑われました。

先生は本堂の阿弥陀さまの前に座って「私の一生涯の間に大蔵経全巻を読ませて下さい。もしそれができなければ、せめて大蔵経の経名だけでも全部読ませて下さい」と涙を流しながら願われました。灯もともらぬ本堂の中で、阿弥陀さまと対座して動かない一人の青年を包んで、夕闇が迫り、夕となり、夜となってゆきました。

やらねばならぬと決意すること、それがすなわち、その目的の達成であります。先生はその念願通り、後年遂に大蔵経全巻を読み了られました。それも普通一般の読み方ではなしに、大無量寿経の眼をもって、すなわち弥陀の本願から大蔵経全巻を徹底的に読み抜かれたのです。

それですから、平生のご講義においても、座右に在る大正新修大蔵経百巻の中から、関係の経典を取り出させて、自由自在に引用し釈義し講説せられました。

★

二十歳の五月、大分県豊前国下毛郡蠣瀬村の照雲寺信昌閣に松島善海和上を訪ねて、空華学徹（真宗学）を学ばれました。そこでは主として松島善譲和上の「真宗論要」の会読が行われていました。あるいは水を浴び、げんこつで頭を打って睡魔を払う連夜不眠の勉強など、文字通り寝食を忘れて学問されました。当時の先生の真剣な勉強ぶりは、その徹底した信心と共に、それから六十幾星霜を経た今日までも、往時信昌閣があった現在の中津市蠣瀬の地に語りつがれているということを、善海和上の法嗣の松島善暁先生が述懐しておられました。

二十四歳の秋、善海和上の膝下を離れて、故郷丸亀に帰られ、次に京都で学ばれるのであります。当時、たまたま手にせられたのが中沢臨川、生田長江著「近代思想十六講」であります。それは、ルソー、ニイチェ、ベルグソン、ゾラ、タゴール等の思想の解説書であります。先生は、大無量寿経の教えが、これらの哲学者の思想の中にそれぞれ分有せられているのを発見して驚喜せられました。

たとえば、ベルグソンでは幾ら歩行の練習を積んでも水泳はできぬ。さあ水中

へ飛び込め。そうすれば君は歩行と水泳のちがいを学び得るであろう。理知によってはより複雑にはなり得るが、より高く、または全く違った境地には達し得ない。意志の力で理知をその圏外に突っ放さねばならぬ。また、ニイチェの神は死せりの思想は単なる無神論や虚無論ではなく、その底には深い宗教的な理念が含まれていることを見抜かれたのです。

　次に、東京において東洋大学での二十七歳の学生として、仏教と哲学の勉強をせられます。そのときカントの「純粋理性批判」のテキストを原書にするか、天野貞祐の日本語訳を用いるかについて、原書によらねばカントの思想の核心を摑めぬという意見が大勢を占めました。先生は、ドイツ人はドイツ語を話しドイツ文字を読む。しかしそのドイツ人はすべてカントを理解し得ているか。言葉ではない。カントの思想そのものの把握を急がねばならぬ。そのために日本語訳を用いようと主張せられ、遂に和訳が採用せられました。

★

　さて、和訳純粋理性批判の最初の一、二行を繰り返し繰り返し読まれましたが全然意味がわかりません。先生はその当時を回想せられて、哲学書のただの数行を理解するのにさえ幾日もの努力を要した。まして仏教はもっと難解なものである。しかし、難解でも無味乾燥でも、自ら努力して読み抜け。千読万読せよ。難解といっても人間が書いたものである。いつかは必ずわかってくる。しかし、お経はわかるために読むのではない。私が仏の国に生れ往く姿を読み取るのであるとつねずね申されておりました。

　「聞いて覚えて学んで知って、それで浄土へ往けるなら、学者の落ちる地獄は無い」

　次に、先生が懐かしく回想せられた難思寮時代、女子大学学生たちと生活を共にしながら、仏教を指導せられたことどもを申し述べねばならないのでありますが、今は省略します。

　昭和三十四年に華園勧学院を創設せられます。その目的は、親鸞聖人の思想の宗派を超えた根源的対決的探求であります。その研究的性格として、次の通り記されてあります。

一、広く宗教全般の哲学的研究をなす。
二、世界思想の動向の経過における新時代への宗教的真理を定立する。
三、凡ゆる思想的イズムを超越して、すべての思想の長所を包括し、それを総合的に統一する真の文化体系を確立する。
四、個々の哲学思想に対して根本的な理念を附与する。
五、科学的思想の経験性を文化の目的的理念にまで止揚し総和する。
六、社会思想の根底に絶対的な世界統一の理念を開顕せしめる。
七、政治経済の合理的運営が奈辺にあるかの根本的研究をする。
八、世界不安の精神的分析的究明によって新らしい生活意識の産出を企図する。
九、民族意識の自覚と世界理念の綜合統

一によって新らしい世界国家の組織に参与する。

十、世界や社会の種々なる新らしい問題に対する偏向性を止揚して新時代への普遍的な原理にまでその理念的な根拠を基礎付ける。

私は曾我量深先生とのご縁で、高円寺の浄雲寺においてたまたま小西迦葉先生の法話を聞きました。そのとき先生の信仰、学問、体験のただならぬものを感じました。不世出の偉聖であると直観しました。かねてから尋ね求めていた真の善知識を先生に見出したのであります。そして高円寺の先生のお宅を訪ねたのが昭和三十一年十一月二十三日の夕でありました。爾来、先生のご講義をわからぬながらも聴聞し続けてまいりました。

★

本誌「女性仏教」にはご縁がありましたので、先生のときどきの座話をまとめて、昭和四十六年六月から昨年十一月まで十五回に亘り「華園座語」と名付けて掲載いたしました。それは私に理解し得られる程度のお話の聞書にすぎません。しかし、これこそ現代の言葉で書かれた歎異鈔であり、安心決定鈔であると申される方があります。

先生は常に、お経の文字に止ってはならない。お経を踏み台にして、もう一つ上へ行け。お経の意味がわかったのは七地沈空の難であり、試行錯誤である。わかったところから、わからぬところへ押し揚げて、くるくる廻っているのが私の勉強法、円環解であると申されておりました。先生は一切原稿無しで、縦横無尽に自由自在の講義をせられました。今日のお話しは昨日のお話しの繰り返しではなく、日々に新らたでありました。常に問題はないか、わからぬ点はないか、尋ねることはないか、質問はないかと申されながら、特に私へ慈眼をそそいで下さいました。

「急げ人、弥陀のみ船のかよう世に、乗り遅れなば誰か渡さん」

この小西迦葉先生が昭和五十二年三月十三日午前一時十二分、慶応病院においてその八十五歳のご生涯を閉じられました。ご病気は痛み無き胃癌でした。葬儀は華園勧学院において興正派前宗務総長千葉葆亮師によって、いとも懇ろにとり行われました。「遠照院釈迦葉居士」

法然上人のご入滅の際には〃奇瑞称計すべからず〃と伝えられていますし、また親鸞聖人のご臨終は〃声に余言をあらわさず、もはら称名たゆることなし〃と書かれております。迦葉先生のご臨終は枕頭の一人一人の顔を見ながら「おおきに」「おおきに」と繰り返し申されて、まことににこやかな笑みを湛えた童眼を閉じられました。

先生は平生、ああ、あんな人がおったか、ただそれだけでよいのだと申されていましたが、まことに飛ぶ鳥がその足跡を大空に残さないように、殆んど世に知られることも無く、一人の平俗な人間としての生涯を終られました。親鸞聖人はその歴史的存在が疑われた時期があったほどに、その時代の人々には殆んど理解せられることも無く〃われは教信沙弥の

定なり〃と申されたような、世に知られない生涯を送られたのに似ております。

★

先生の著書は僅か一、二冊にすぎません。大無量寿経円環解、教行信証円環解をはじめ厖大な論、釈、訓点、索引等はみな、先生のご口述を弟子たちが筆録したものであります。先生の自伝としては口述の「迦葉おろかし記」があります。

先生が一野人のままで八十五年のご生涯を自由に信仰と学問に生きられた蔭には、先生の学徳を慕って結集した少なからぬ人たちの真心がありました。特に先生の後年においての小西隆子（奥様）、小西美代子、久田富子、市川孝子の諸氏の心使いは献身的なものでありました。それはまことに生きている「女性仏教」であります。私たちを弘願の本座へ躍入せしめんがために、真宗学の徹底的な研究指導を、文字通り非僧非俗の姿そのままで一生涯を貫ぬき通された迦葉先生の存在は、まことに二十世紀日本の一つの驚異であると思います。

何日かの春の夜のことでありました。講義を終えて部屋を出られるときに、「死ぬるとはこういうことである」と申されて、障子を開き、「ハイさようなら」と障子を閉めて、外の廊下に姿を消されました。それから暫くしてから、障子を少し開けてにこにこと一同を見渡されました。

先生の御作に、

我等本来無一物
久遠劫来作極悪
一闡提海無出期
猶如盲亀遇浮木
難値本願真実法
願力住持生安養
来生応報弘誓恩
唯楽還相利他行

弟子の三重野知々子さんがその著「歎徳文」において親鸞聖人を讃えた結文を此処に引用させて頂いて、この讃嘆をそのまま、偉聖小西迦葉先生に捧げたいと思います。

「燦然たる聖者の足跡は望みを高うすれど昇るによしなく、教の義は円融なれど証るに及ぶべきもないことを知る吾々に、親鸞聖人は人間そのままの生活の中に、教の深義を示されたのであった。

『行にまよひ信にまどい心くらく識すくなく、悪おもくさはりおほき』

吾々は、ただ祖師の人格の前に言い知れない懐かしさを感じ、その体験の深さに驚嘆するのみである。……祖師聖人は仏智の深処に入りて仏智を忘れ、行を究竟じて行を忘れ、ただ一人の愚禿親鸞として純真に報土への一路を願生されたのであったことは、やがて法滅百歳の現代をして再び正法隆起の聖代にし、梅怛利耶の三会にさきかけて、仏法の真理を実現する契機を残されているのではないだろうか。そこにはもはや、讃ずるに筆のあとを絶ち、嘆ずるに舌根を失い、ただ私は黙して『しかれば大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮みぬれば、至徳の風しずかに衆禍の波転ず』の領域を静かに法悦のみである」

（完）